

## 中国における二言語教育の現状

新 島 翠

## 中国双語文教学的現状

新 島 翠

### 摘 要

双語是指個人或集体操兩種以上語言的現象，双語教学即是用兩種或兩種以上的語言文字進行教学。在今天，強調双語教学仍有其現實意義。中国是一個多民族多語種的国家，民族教育建立双語教育体系，是發展民族教育的必經之路。但双語教育教学体系應如何根据不同民族的实际（边境和内地，聚居区和雜居区，發達地区和不發達地区等）採取不同的手段，及双語教学的關係如何處理是大家關心的問題。中国的少数民族双語教育，对筆者目前正在從事的漢語教学工作，有值得参考的地方。

1994年9月27日

關鍵詞：双語教育 多民族 民族教育 民族語文 教学類型

二言語教育は、二言語の使用が必要とされる地域や国で多く試みられてきた教育法である。二言語教育では、第2言語の習得を目的として、カリキュラムの一部において第2言語を用いた指導がなされていく。その先例はカナダ、アメリカなどにみることができる。

本稿では、中国の少数民族に対して行われている漢語（中国語）教育について、二言語教育の側面から見ていくことにしたい<sup>(1)</sup>。

筆者は現在漢語教育に携わっており、日本語を第1言語とする学生にいかにも効果的に漢語を教えていくかは重要なテーマである。中国少数民族を対象に行われている二言語教育には、日本での漢語教育において参考となしうる点があり、また、中国における二言語教育について、これまで日本ではあまり研究、報告がなされていないため、現状を紹介すると共に、若干の見解を述べてみたい。

《表1》中国少数民族の言語系統

			使用人口
漢・西蔵語族	漢語	(漢族以外に、回族、満州族も使用する)	(万人)
	西蔵・ビルマ語群	西蔵, 嘉戎, 門巴; 彝, 納西, リス, 哈尼, ラフ, 基諾; 景頗; 載瓦, 阿昌; 羌, 独竜, 怒, 白, 土家, 珞巴, 普米	4,000
	壮・侗語群 苗・瑤語群 語群未定	壮, 布依, 傣; 侗, ムーラオ, 水, 毛南, ラカ; 黎 苗, 布努; 瑤, 勉; シェー コーラオ	
アルタイ語族	突厥語群	ウイグル, カザフ, ウズベク, タタール, サラ; キルギス, 西部ユーク, 凶瓦;	1,000
	蒙古語群 満・ツングース語群	蒙古, タタール, 土, 東郷, 保安, 東部ユーク, 満州, シボ, ホジェン; ツングース, オロチョン, エベンキ	
南アジア語族	ワ, 布朗, ドアン		37
インド・ヨーロッパ語族	オロス; タジク		3
南島語族	高山		23
語群未定	京, 朝鮮		170

本表は、『当代中国的民族工作』P296及び『中国民族教育発展途徑探討』P211-212を参照して作成したものである。

## 一 多民族国家中国の多様な言語

多民族国家である中国には多くの民族が居住している。しかし、最も多くの人口を擁するのは漢族で、総人口の92%を占め、他の民族は一括して少数民族と称される。人口のわずか8%ほどを占めるにすぎない少数民族であるが、分布している地域は全国土の63.8%に及ぶ。また、その多くが、王朝の交替、戦争、自然災害などにより歴史上数度にわたる遷徙移動を繰り返している。そのため、各民族は聚居したり、散居したり、また、複数民族と雑居するといった複雑な居住形態をとっている。そのことが少数民族の言語文化にも大きな影響を与えていると言えよう。少数民族の言語の状況を言語系統から分けたものが《表1》である。

少数民族各族は、コミュニケーションの手段として、どの言語を使用しているのだろうか。ここに興味深い統計がある。主な伝達手段として母語を使用する民族は56民族中45民族であるという<sup>(2)</sup>。雲南省、貴州省を例にとると、雲南省では全人口の1/5にあたる約700万人が伝達手段として母語を使用しており、貴州省でも全人口の1/10にあたる320万人が母語に頼っている。即ち、2省だけで1,000万人近い人が中国の共通語である漢語を使わずに暮らしているのである。

当然のことながら、どの民族にも漢語を使用できる人々がいる。少数民族の中での漢語人口を調べた結果によると<sup>(3)</sup>、人口の80%以上が漢語を使用できる民族は11民族、50~79%が漢語を使用できるのは19民族、50%以下は23民族である。

さらに、民族間での公用語としては、漢語が使われる場合が多いが、近隣の優勢な民族の言語が公用語となっている場合もある。例えば、タタール、キルギスは蒙古語とウイグル語、エベンキは蒙古語を使用しており、ウズベク、タジク、カザフなどはウイグル語である。ロツパ、メンパなどはチベット語、ドアン、ラフ、アチャン、ジノー、ワ、ハニなどはタイ語を使用しており、ヤオ、トン、プイ、スイ、ムーラオ、マオナンなどはチワン語を使っている。即ち、蒙古語、ウイグル語、チベット語、タイ語、チワン語は限定された地域での公用語となっているのである。他民族の言語が地域の公用語であるばかりか、民族の母語になってしまっている例もある。回族、満州族では漢語が母語となっている。トウチャ、シボ、キン、コーラオ、ホジェン、シェーなどは多くが漢語を母語的に使用しており、ウズベク、タタールはウイグル語が母語となっている。

さらに、各民族の文字についても、固有の文字を持つ民族、持たない民族、新たに文字を作った民族など一様ではない<sup>(4)</sup>。

## 二 二言語教育の確立

前章で述べた如く、二言語併用或いは多言語併用の民族が多くを占める中国において、複数の民族が雑居している地域の学校教育では、どの言語を使うことが最も適当であるかは重要な問題であろう。同時に、中国における共通語であり、高等教育、科学技術を担う言語は漢語であるという事実を考えた場合、少数民族言語を第1言語とする学生に、いかに漢語を習得させるかが大きな問題となってくる。中国ではどのような経過をたどって、二言語教育を導入し普及させてきたのであろうか。中国における二言語教育への動きは、1900年代の初頭から見られるようになってきている。その報告書<sup>(5)</sup>を参考にしながら、現在までの二言語教育の足跡をたどってみたい。

まず、創設期とも言える1905年から47年までを見ていくことにする。

1905年、英国の宣教師が貴州省でミャオ語の教育施設を設け、ミャオ文字による教育を行っている。これが少数民族の第一言語による教育の初めとされている。1913年には、甘粛省の学校で蒙古語による授業が行われた<sup>(6)</sup>。

1930年以降、中国教育部が二言語教育政策を打ち出し、蒙古語、チベット語、ウイグル語など少数民族言語による小学校教科書が作成され、各民族の文化促進会によって学校が設立された。1938年には、中共六中全会において、「少数民族の文化、宗教、習慣を尊重し、漢語を学ぶことを強制してはならない。少数民族が自らの言語と文字によって教育を進めていくことを賛助しなければならない」ことが強調された<sup>(7)</sup>。これによって、それまで漢語によって行われてきた少数民族教育が大きな転換期を迎えた。1938年の統計によれば、新疆の促進会の設立した学校は1,840カ所、在校生105,087人。そのうち、ウイグル族の学校は1,540カ所、学生は89,804人、ハサク族およびキルギス族277カ所、14,322人、ウイグル族1カ所、44人で

ある。いずれの小学校でも、低学年では第一言語によって教育を行い、高学年から漢語教育が始められている<sup>(8)</sup>。

民族学者芮逸夫氏も、1938年に西南の少数民族を対象とした国語教育の重要性を指摘し、西南少数民族と漢族の間、及び、少数民族間に共通の言語がないことが様々な障害を生むものになっているとして、「漢語を音標文字によって表記する。少数民族言語を音標文字によって表記する。」という2つの方法を提起している<sup>(9)</sup>。

芮氏が音標文字の使用を推進しようとしたのは、2種の事例が念頭にあったためと言える。一つは、ソ連が1930年代ロシア語をローマ字化して普及させ、またソ連領内の少数民族の様々な文字も全てローマ字化することによって文盲を一掃したこと。もう一つは、西南中国で、西欧の宣教師たちが少数民族の言葉をローマ字表記し、教会の教義を教え広めた例を見たからである。芮氏が論文に引用した、1934年の雲南における宣教師の布教活動の主なものは、次の通りである。

瀾滄県では、イギリス人宣教師父子がカワ山一帯に17の学校と福音宣伝所90カ所を建て、信者は1万5千人にのぼった。ロヘイ山一帯では14の学校、福音宣伝所136カ所が設けられ、信者は2万3千人であった。しかもその中の1校では、男女の学生数は200人という規模であった。また、車里県では、やはりイギリス人の宣教師が、病院と教会学校を建て、少数民族の言語をローマ字で表記した聖書などを作って布教している。路南県ではフランス人神父が教会と学校を設立している。

芮氏自身1935年、36年の二度にわたり雲南の辺境地帯を調査し、瀾滄県、双江県、及び、猛土司、角董土司、耿馬土司の支配する地域で教会の教育を実際に見ており、ローマ字で表記した少数民族言語の書籍は、ロロ語(イ語)、カチン語、ワ語、リス語などがあったという。ローマ字化が教育の普及に非常に有効であることを、これで実感したと思われる。

1947年以前の段階は、二言語教育がどの程度行われていたか疑問が残る。しかし、少数民族に対しては、少数民族の言語で教育することが効果的であること、そのために何が必要かが確認されていった。

次に、発展期の1947年から1958年までについて見ていくことにする。

1947年、内蒙古自治区が成立したのち、漢語教育政策が実施され、全自治区に蒙古語・漢語の二言語教育をおこなう小中学校が作られていった。1951年には第一次民族教育会議が開かれ、蒙古族、朝鮮族、チベット族、ウイグル族、ハサク族など、文字を持つ民族の小中学校では第1言語で教育を行うことが決定された。また、無文字或いは不完全な文字を持つ民族は、文字の作成または改革を行いながら、漢語または第1言語によって教育を行うことが決定された。無論、どちらの言語にするかは民族の選択に任されている<sup>(10)</sup>。

1957年には少数民族の文字の創作及び改良案が批准された。それにより、文字を持たない10の民族(チワン族、パイ族、ミヤオ族、トン族、ハニ族、リー族など)がローマ字による

## 中国における二言語教育の現状

文字を創作し、イ族、ラフ族、タイ族などが従来からあった文字に改良を加えている<sup>(11)</sup>。

この期間は、第1言語による教育の比重が増していく傾向にある。その状況を、北部、中部、南部各地域に分けて見ることにする。

北部地区（内蒙古、延辺、新疆）の蒙古、朝鮮、ウイグル、ハサク、キルギス、シボなどの民族は、1958年までに小学校から中学校（朝鮮族は大学）までの二言語教育体制を確立している。具体的には、言語別の学校の設立、或いは、言語別のクラス分け、第1言語による各教科の授業（漢語科目を除く）、第1言語に堪能な教員の配備などが行われている。また、第1言語による教科書は小学校から高校まで一貫して作成されている。

次に、中部地区（青海、西藏、甘肅、四川）について述べる。1950～57年にかけて、青海省で467の民族小学校が設立された。チベット族の小学校ではチベット語で授業が行われ、56年にはチベット語の教科書が出版されている。チベット地区では1951～58年に、13の小学校と中学1校が設立され、小学校では全て二言語教育が行われた。甘肅省天祝県では50年代初め、6カ所の小学校にチベット語科目が設けられ、その中の1校ではチベット語で授業が行われた。四川省では50年代初頭、チベット族およびイ族の一部の学校で二言語教育が行われ、1957年には、小学校1年の授業は全て第1言語で行われ、他の学年でも、漢語による授業を減らし、第1言語による授業を増加させている。

最後に、南部地区（雲南、貴州、広西、湖南）であるが、北部地区での二言語教育体制が整った時期に、南部地区での二言語教育がようやく始まっている。則ち、1956年に、雲南省シーサパンナのタイ族、1957年には雲南省徳宏のチンポー族、タイ族、リス族が小学1年で二言語教育を始めるようになった。貴州省ではミャオ、プイ、トン語、広西チワン族自治区武鳴ではチワン語、湖南省湘西ではミャオ語の学校がそれぞれ設立され、それらの学校では新たに作られた、或いは、改良された民族文字によって授業が行われた<sup>(12)</sup>。

1958年から始まる二言語教育の停滞期は、文化大革命によってピークを迎える。この間、少数民族の学校は、廃止、合併を余儀なくされ、第1言語による授業も削減、中止された。しかし、こうした中であって、内蒙古、延辺などいくつかの地区では、他地域ほど深刻な影響を受けることはなかった。とりわけ内蒙古では第1言語重視の教育がなされ、1962年には蒙古語・漢語の教科書が編纂され、小学校3年から漢語による授業が行われた。1963年、延辺朝鮮族自治区では、小学2年から漢語による授業が始められ、二言語併用教育は高校まで続いた。甘肅省甘南のチベット族地区の120の学校では、チベット語の授業が行われた。南部地区についても、50年代末から60年代初め、広西でチワン語の学校が53作られ、雲南省のラフ族、ワ族地区でも第1言語による学校が作られている。

1976年以降、多くの地域で文革中に閉鎖されていた少数民族のための小中学校が再開され、第1言語による教育が復活した。とりわけ、1978年の中共第11回3中全会において、少数民族の教育は民族の特色を生かして行われるべきであることが再認識されてからは、その傾向

は顕著である。1978年12月には四川省で第1言語による教育が拡大された。また、1980年には、新疆の各民族の小学校で1～3年は第1言語による授業、4年から漢語の授業が開始された。甘肅省では民族言語別の授業が行われ、広西でもチワン語の学校が再開された<sup>(13)</sup>。

1984年に民族区域自治法が制定され、第36条に「民族自治地方の自治機関は国の教育方針に基づき、法律の規定に照らして、当該地方の教育計画、各種の学校の設置、学制、学校運営形式、教育内容、教授言語、学生募集方法を定める事が出来る」と規定された。また、第37条では「少数民族の学生が主となる学校では、条件が許せば、少数民族の文字による教科書を採用し、少数民族の言語を用いて授業すべきである。小学校高学年、或いは、中学高校では、漢語科目を設け、全国に通用する共通語を普及すべきである」と規定された<sup>(14)</sup>。これにより、各地の現状にあわせて学制等が定められた。漢語授業の開始時期は、新疆ウイグル自治区の11年制小中学校では、小学4年、延辺朝鮮族の小学校（5年制）では2年生、青海チベット族小学校（6年制）では4年生、涼山イ族地区の小学校（6年制）では1年からである。各民族の言語による教育はいずれも1年から始まっている。また、漢語授業の継続期間は、イ族を除き、他はいずれも高等学校卒業までである<sup>(15)</sup>。

以上、二言語教育の導入から普及に至るまで、年代別、地域別に見てきた。次に示す統計<表2>は、民族別に二言語教育を実施している学校数と学生数を示したもので、1989年に作成されたものである。この統計から、内蒙古の蒙古族学生の約60%は二言語教育を受けていることが理解できる。

### 三 二言語教育の類型

現在中国では、海外のバイリンガリズムに関する理論、カナダ、ベルギー、ソ連などの事例が参照され、地域、民族、学生の漢語のレベル等の違いによって、各種の二言語教育が試みられている。その多様な二言語教育は、地域の特性を生かした教授法によって分類されており、そこから中国における特徴と傾向を見ることができる。

嚴学窘氏によって1985年に出された分類によれば、中国の二言語教育は延辺式、内蒙古式、西藏式、新疆式、西南式、文盲一掃式の6種である。これは、中国における二言語教育の初めての類型として評価できる。しかし、一地域一方式とは限らず、地域を越えて同一方式が採られることもあり、また、地理とは概念の異なる方式を第6方式としているなど問題がある。

1987年には、張偉氏が単一言語教育型、二言語移行型、長期二言語型の3種に分類し、それぞれの弊害と利点を述べている<sup>(16)</sup>。それによれば、第一の単一言語型は、漢語のみを用いて教育を行う方式であり、これまで主として中国南部の少数民族を対象に行われてきた。学生を漢語漬けにするため、以後の中高等教育との関連が密になるという利点はあるが、漢語のレベルの低い学生は学習内容、技能が習得しにくい、卒業後漢語を忘れればまた文盲に戻

中国における二言語教育の現状

《表2》二言語教育実施校

地区	使用言語	学 校 数 (カ 所)	学 生 数	教 材
新疆	ウイグル	小学3,558 中高552	1,586,000	自治区編訳教材
	カザフ	小学 789 中高190		
	キルギス	小学 82 中高 16		
	蒙 古	小学 73 中高 28		八省区協編教材
	シ ボ	小学 8 中高 5		
	オ ロ ス	小学 1 中高 1		
	17の大学で部分的にウイグル語・カザフ語による講義を導入			
内蒙古	蒙 古	小学3,216 中高383 中専, 職業中高75 19の大学の107学科中23学科に蒙古語による講義がある。	391,135 蒙古学生 の59.8%	八省区協編教材 自治区編訳教材 三省協編教材
黒竜江	蒙 古	合計9校		八省区協編教材
遼寧	蒙 古	小学 467 中高 82		同上
	朝 鮮	小学 163 中高 31		三省協編教材
吉林	朝 鮮	小学 604 中学110	160,000	同上
	蒙 古	高校 2		八省区協編教材
チベット	チベット	小学中高 中専 3大学の25学科でチベット語の講義	127,000	五省区協編教材 自治区編訳教材
青海	蒙 古	小学 20 中高 2	1,900	同上
	チベット	小学 727 中高 32 師範 6 大学 2	69,000	五省区協編教材
甘肅	チベット 蒙 古	小中高 216 中専 3 大学 2	27,035	同上 八省区協編教材
貴州	ミャオ, トン, イ プ イ ス イ	小中高 388 文盲クラス3,535	24,987 122,268	省内編訳教材
四川	涼山イ チベット	小中高1,121 中専 10 大学 4	68,300	省内編訳教材 五省区協編教材
雲南	タイルー, タイナー, タイボン, チンポー, ザイワ, ワ, リス, イ, 白, ハニ, ナシ, ラフ, ミャオ, チワン, トゥー ロン 合計1,067校		50,000	省内編訳教材
広西	チワン	小学902クラス 中高 31クラス チワン語クラス4カ所	5,000	自治区編訳教材
	ヤオ	86年試験クラスを開始		
湖南	ミャオ トウチャ	合計25校4クラス 竜山県試験クラス		自治州編訳教材

陳紅濤『中国民族教育発展途徑探討』1990年 中央民族学院出版社 P227-230より。

るなどの弊害がある。第二の二言語移行型は雲南、貴州等で多く行われている方式である。入学当初は母語を用いて教育し、2年生以降漢語を導入し、学年が上になるにつれて漢語の比重が増大する。母語を使うことにより学生の心理的負担を軽減し、理解力を高めることができ、漢語の習得力も高まる。現在この方式が最も支持され、効果も高いことが証明されつつある。しかし、民族の言語による教材を必要とするため、高等教育では導入が難しく、現状では小中学校に限定されて行われている。第三の方式は、第二の方式を小学校から大学まで続けるもので、内蒙古自治区、新疆ウイグル自治区、延辺朝鮮族自治州、チベット自治区でこの方式が採られている。

張氏の分類を踏まえて、更に詳細に行ったのが周慶生氏である。周氏は保持型、移行型など5種に分類した後、各型をさらに細分化している<sup>(17)</sup>。

## 1. 保持型

第1言語及び民族固有の文化を保存保護することを重視する方式である。

### (1) 保持I型

各学年の科目は主として第1言語で教え、小学2、3年から漢語の授業を1講時設ける。小学校卒業また中学卒業までその状態を続ける。この方式は少数民族が聚居する地域あるいは第1言語しか使えない生徒に好評という。この方式を実施するには、まず、その民族が文字を持っていること、その文字による教科書ができていないこと、第1言語を使える教員がいることが必須条件である。

### (2) 保持II型

授業は漢語で行い、第1言語の授業は1講時だけとする。この方式で小学校低学年から卒業まで、または中学卒業まで続ける。中国北部地域で多く採用されており、第1言語を失ってしまった少数民族の生徒が対象となっている。また、第1言語を使える教員の数が不足している地域でも行われている。

### (3) 保持III型

科目によって第1言語による授業と漢語による授業とに分け、小学から中学までこの方式で授業を続ける。これは理科系の授業を担当する教員が第1言語を使えない場合多く採用されている。

保持型を実施しているのは、内蒙古、新疆、黒竜江、吉林、遼寧、青海、甘肅の蒙古族；吉林、黒竜江、遼寧、内蒙古の朝鮮族；新疆のウイグル、ハサク、キルギス、シボ、オロス族；チベット、青海、甘肅、四川、雲南のチベット族；広西のチワン族、四川の彝族である。

## 2. 移行型

この方式は、第1言語から漢語への移行をスムーズに進めるため用いられる。文字を持たない民族、或いは、新中国成立後文字を作成したがまだ定着していない民族に採用されてお



## 中国における二言語教育の現状

り、地域的には華中、華南、西南地域に多い。漢語の単一言語教育と比べ効果的であることが実証されている。通常、小学1、2年では第1言語で授業を行い、3、4年から漢語と第1言語を併用して授業を行う。5、6年では主として漢語による授業となる。移行型はさらに以下の如く細分類される。

### (1) 三段式

国語の授業を第1言語段階、二言語併用段階、漢語段階の3段階に分けて進め、他の科目の授業は漢語により行い、7年制をとる。具体的には、1、2年では第1言語で授業を行い、3、4年で二言語併用の教科書を用いて授業を行う。5、6、7年では漢語の全国統一教科書を用い、週8講時は主として漢語による授業を行う。第1言語による授業についても週3講時設定されている。この方式は雲南省滄源県賀南小学校のワ族のクラスで実験的に行われている。

### (2) 二段式

- a) 二言語併用と漢語の二段階式。1～3年までは二言語併用で授業が行われるが、第1言語の時間を徐々に減少させる。4～6年は漢語のみの授業となるが、補助的に第一言語も使用する。雲南省劍川県西中小学校のパイ語・漢語二言語併用クラスでこの方法を採用している。
- b) 第1言語と漢語の二段階式。通常1～3年までは第1言語で授業を行い、4～6年は漢語の授業となるが、補助的に第1言語を使用する。雲南省孟海県のタイ族小学校、滄源県南臘小学校のワ族クラスはこの方式を採用している。

## 3. 傾斜式

小学1年で第1言語科目と漢語会話科目を設ける。2～6年では第1言語の授業を徐々に減少させ、逆に漢語の授業を増加させていく。雲南省徳宏のタイ族、チンポー族、リス族の小学校にこの型が多い。

## 4. 補助式

入学後の半年から1年間は第1言語のローマ字表記を学び、以後漢語のローマ字表記に移行する。この方式は貴州省台江、黎平等のトン語、ミャオ語の実験クラスで多く採用されている。文字のない民族は、第1言語を授業の補助として用いる。特に、文字を持たない民族や民族の文字を用いた教材がない場合、この方式をとることが多い。

## 5. 臨時型

小学校入学当初から漢語で授業を行う。小学校卒業の2～3カ月前、第一言語の書き方を教える。これは第1言語に関する文盲をなくすためである。この方式と保存II型の違いは、後者の第1言語学習は初期段階では時間数が少なく、上級になるにつれて多くなっていくが、前者は、上級になって初めて第1言語を学ぶのであり、時間数も少なく、レベルも低い。この方式は雲南省シーサンパンナ・タイ族自治州のタイ族小学校で採用されている。ただ、こ

の方式は臨時的に使われる場合はよいが、長期にわたって行われると、多くの問題が出現するといふ。

上に述べた二言語教育の方式は各地域の特性、即ち、民族固有の文字（ローマ字表記も含め）の有無、民族の文字を用いた教材の有無、第一言語を使う教員の有無、を考慮して作り出されたものと言えよう。保持型の多い内蒙古、延辺等では小中学校のほとんどで二言語教育が導入されているが、移行型の多い貴州、四川、雲南、広西等では二言語教育はまだ実験段階であり、一部の学校で導入されているにすぎない。

#### 四 二言語教育の事例

二言語教育の事例として、中国の少数民族の中で最も人口の多いチワン族の例を以下に述べてみよう。

現在広西に住むチワン族約1,400万人のうち、漢語を話し、書くことができるのは300万人余りであると言われている<sup>(18)</sup>。

中華人民共和国成立後、チワン族の居住する地域の教育改革が進められ、母語であるチワン語しか話せない児童に対して、漢語による教育が行われた。その方法として、学制、教材など漢族の学校と全て同じものが用いられたのである。しかし、その結果は芳しいものではなかった。武鳴県など16の県を調査した報告によれば<sup>(19)</sup>、1980年小学校漢語クラスへ入学した児童総数は265,282人で、卒業したのは入学者の46.9%、124,546人であり、留年、退学は53.1%、140,836人であったのである。中には、留年、退学率が70～86%にのぼる小学校もあったほどである。このように、小学校での基礎教育が充分理解できていないため、中学入学後の成績も大幅な進展は見られないのは当然のことである。このような状況を打開すべく、1980年5月、チワン族自治区党委員会でチワン族文字の復活使用が決議された<sup>(20)</sup>。1981年秋にはチワン語と漢語の二言語教育が一部の実験小学校で試験的に始められている。また、1986年秋に、武鳴県、徳保県でチワン語中学校が試験的に開設され、1989年秋には広西の22の県にチワン語中学校が設置されたのである。在校生総数3,499人であった<sup>(21)</sup>。

さて、1981年から始まった二言語教育はどのような方式で行われているのであろうか。以下に小学校の例を紹介してみよう<sup>(22)</sup>。

チワン族の小学校では、教材は中国の全国統一教科書をチワン語に翻訳したものを使い、授業もチワン語で行う。小学2年から漢語科目を必修として設け、チワン語と漢語の二言語教育を行う。小学校卒業時の漢語能力は、中国の教育指導要項に定められた、常用漢字2,500字を習得し、漢語で短文が書ける水準である。この方式はチワン族が聚居する46の県の385の小学校でおこなわれている。

具体的な授業方法としては、生徒は先ずチワン文字を書くことから学び始める。チワン文字は表音文字であるため、話す言葉をそのまま文字化していけばよく、理解しやすい。生徒

中国における二言語教育の現状

《表3》貴州古山小学校チワン語クラスと平龍小学校漢語クラスの期末共通試験の結果

学校	年	人数	チワン語		漢語		数学	
			平均点	優秀率	平均点	優秀率	平均点	優秀率
古山	1	53	82.7	71.7	79.9	68.6	85.3	73.6
平龍	1	30			66.9	20	74.2	47
古山	2	80	76.6	45	82.3	65	80	73.8
平龍	2	32			75.9	50	77.4	37.5
古山	3	49	71.4	30.6	71	34	70.5	28
平龍	3	37			58.6	0	66.7	18.9
古山	4	64	81.7	67.2	81.8	62.5	59.9	10.9
平龍	4	34			58.6	58.8	57.5	9

- 注 1 優秀率とは、100点満点で80点以上をとった者の比率。  
 2 本表は覃輝庭「勇於改革探索 発展民族教育」『中国少数民族語言文字使用和发展問題』P153を参考に作成したものである。

《表4》武鳴県における1988年1月の期末統一試験の結果比較

学校	学年	漢語	数学	物理	英語	歴史	生物
南寧中学	1	76.9	67.5		57.3	35.1	28.8
城廂中学	1	70.4	70.4		49	30.1	47.8
民族中学	1	61.8	65.8		76.6	49.4	57.1
南寧中学	2	82.2	46.6	59.8	43.9	37.3	54.1
城廂中学	2	88	34.6	42.3	49.5	40	55.1
民族中学	2	55.1	59.8	63.9	53.9	51.3	61.8

- 注 1 民族中学は少数民族だけが通う中学のことで、その中のチワン語クラスが調査対象となっている。  
 2 城廂中学は、武鳴県の県庁所在地の中学である。  
 3 本表は覃輝庭「勇於改革探索 発展民族教育」『中国少数民族語言文字使用和发展問題』P153を参考に作成したものである。

の使う言葉がチワン語の方言であれば、初期段階では方言のまま読み書きさせ、後に標準語へ移行させる。

1年生では主としてチワン文字で文を作り、2年生で日記や短文を書く。生徒がチワン文字を使いこなせるようになった時点（通常は2年生）で漢語の発音のローマ字表記を学ぶ。チワン文字と対比させながら教えれば、12から15講時で漢語のローマ字表記および発音をマ

スターすることができる(チワン語を全く教えず、最初から漢語のみで教授した場合は、ローマ字表記をマスターするのに50から60講時を必要とする)。次の段階として、チワン語の文章を学ぶ際、対照させながら漢字を学んでいく。漢語の授業ではチワン語を併用することによって理解を早めている。

以上のような状況を見る限り、現在チワン族で採られている方式は、漢語科目が他の教科と並列する方式であり、漢語で他の教科を学習させるプログラム(イメージン・プログラム)ではないと思われる。

こうした方法を採用した上林県の132の小学校の各学年について、県教育局が、1987年から1988年の期末試験の結果を集計したところ、皇周小学校のチワン語クラスの1, 2, 3年生の国語、算数の平均点、合格率、優秀率(100点満点で80点以上をとった者の比率)はいずれも県内で3位であった<sup>(23)</sup>。また、貴県(現貴港市)の二言語教育の成果についても調査がなされている。対象となったのは、古山小学校のチワン語クラスと、平竜小学校の漢語クラスである。《表3》に示す通り、期末統一試験の結果は、各学年とも、古山小が平竜小を上回っている。言い替えれば、これは、小学校に入学後、まずチワン語の読み書き、標準語を学び、母語に関する必要な知識を身につけてから漢語を学ぶ方が、はるかに効果的であることを示している。

次に、武鳴県内の中学の二言語教育の成果を《表4》に示す。これは、1988年1月の南寧市の統一試験の成績を比較したものである。1年次、2年次とも、3中学の成績に格差はみられない。

以上、中国における二言語教育の現状を、事例をまじえて見てきた。現在中国で行われている二言語教育は、漢語科目が他の教科と並列して設置される方式と、イメージン・プログラムとが混在していると思われる。北方の蒙古族、朝鮮族などの場合は、二言語教育法がすでに確立されており、イメージン・プログラムも導入されていると考えられるが、プログラムの開始時期は、早期、後期の両方が用いられているようである。南方の少数民族の場合は、資料を見る限り並列方式が多数を占め、その具体内容も、民族の数だけ教育法があると言えるのではないかと思わせるほど複雑である。

また、中国の二言語教育を考えるうえで重要な、文盲一掃教育、文字改革などの政策、および二言語併用については、今回は現状を紹介しつつ簡単に言及しただけである。さらに詳しい資料を待って、再度検討を加えていく予定である。

謝辞 本稿執筆にあたって、胡起望教授に適切な助言を頂いたことを感謝します。

注

- (1) 「漢語」とは漢族の言語という意味である。中国で最も使用人口の多い言語であり、現代漢語の標準語が中国の共通語となっている。ここでは「漢語」は、いわゆる「中国語」のこととして使っている。
- (2) 陳紅濤『中国民族教育發展途徑探討』中央民族学院出版社 1990年 P 212。
- (3) 同上 P 213。
- (4) 新中国成立以前に文字を持っていた少数民族は21民族、言語数は28種である。そのうち、現在も使われているのは、12民族(蒙古、チベット、ウイグル、朝鮮、カザフ、キルギス、シボ、イ、タイ、チンポー、ラフ、オロス)の17種の文字である。ウズベク族、タタール族は、自己の文字を使うことをやめて、ウイグル文字を使用している。ナシ、満、スイ、リス、チワン、ヤオ等の民族の文字は、現在ではほとんど使われていない。新中国になって、文字を作成した民族は、プイ、ミャオ、イ、リー、ナシ、リス、ハニ、ワ、トンなどがあり、文字の改良を行った民族は、ラフ、チンポー、タイ、ウイグル、カザフなどである。『当代中国的民族工作』当代中国出版社 1993年 P 295-297。
- (5) 周慶生「中国双語教育的發展与問題」『貴州民族研究』1991年第2期 P 122-128。
- (6) 前掲論文 P 123。
- (7) 謝啓晃『中国民族教育史綱』1989年 広西教育出版社 P 186。
- (8) 周慶生 前掲論文 P 123。
- (9) 芮逸夫「西南民族語文教育芻義」『中国民族及其文化論稿 下』1972年 芸文印書館 P 1369。
- (10) 周慶生 前掲論文 P 123。
- (11) 謝啓晃 前掲書 P 187。なお、文字案が国務院によって正式に批准されたのは新チワン文字のみである。
- (12) 周慶生 前掲論文 P 124-125。
- (13) 周慶生 前掲論文 P 125。
- (14) 王懷安等主編『中華人民共和国法律全書』吉林人民出版社 1989年 P 45。
- (15) 謝啓晃 前掲書 P 112-117。
- (16) 張偉「浅談双語教学的類型」『貴州民族研究』1987年第3期 P 42-45。
- (17) 周慶生「中国双語教育類型」『民族語文』1991年第3期 P 65-69。
- (18) 覃耀庭「勇於改革探索 發展民族教育」『中国少数民族言語文字使用和發展問題』1993年2月 中国蔵学出版社 P 148。
- (19) 同上 P 149。
- (20) チワン族の古文字は唐代に作られ、新中国になった後も、ごく一部で使用されたが、標準化されていないため、広く普及させるには不都合なことが多い。そこで、新たに文字を作ることになり、1952年から準備が始められ、1957年に国務院において正式にチワン文字規則が定められた。ローマ字による表音文字である。文革期はこのチワン文字を使用することは許されなかった。文革終了後の1980年に、チワン文字を再度使用することが自治区の党委員会決定され、1982年チワン文字規則に修正が加えられている。
- (21) 莫家裕「広西少数民族語文工作及工作機構」『民族語文』1993年2期 P 72。
- (22) 覃耀庭 前掲論文 P 152。
- (23) 覃耀庭 前掲論文 P 153。

## 参 考 文 献

- 馬学良『民族語言教学文集』四川民族出版社 1988年
- 馬学良, 戴慶夏「我国民族地区双語研究中的幾個問題」『民族研究』1984年 第4期 P53-58
- 王錫宏『中国辺境民族教育』中央民族学院出版社 1990年
- 楊武『中国民族地理学』中央民族学院出版社 1993年
- 謝啓晃他『中国民族教育發展戰略抉択』中央民族学院出版社 1991年
- 国家民族事務委員会中共中央文献研究室『新时期民族工作文献選編』1990年 中央文献出版社
- 孫若窮『中国少数民族教育学概論』中国労働出版社 1990年
- 中共中央文献研究室編『三中全会以来』人民出版社 1982年
- 中国社会科学院民族研究所, 国家民族事務委員会文化宣伝司編『中国少数民族語言文字使用和發展問題』中国  
蔵学出版社 1993年
- 田恵剛「談双語—多語現象」『語言教学与研究』1994年第1期 P143-152
- 陳其光「語言, 文字和民族」『中央民族学院学報』1993年第6期
- 芳賀 純『二言語併用の心理』朝倉書店 1979年
- 関口礼子『カナダの多文化主義教育に関する学際的研究』図書館情報大学 1987年
- 林田享子「オーストラリアにおける移民政策と第二言語教育」『岐教大紀要』第17集 1989年 P65-81
- ビビアン・クック (米山朝二訳)『第2言語の学習と教授』研究社出版 1993年